

ART KISS LETTER

TITLE

熊本市現代美術館開館20周年記念
不思議の森に棲む服
ひびのこづえ×
KUMAMOTO展

DATE

2022
7. 2 ㈯ — 9. 19 ㈪

開館時間 10:00—20:00(展覧会入場は19:30まで)
休館日 火曜日



ROOTの衣装で踊るアオイヤマダ 2021
photo: 上原勇

連続テレビ小説

『日比野こづえの味噌汁』

野田秀樹

初めて私が、日比野こづえと出会った時、彼女は、ぴかぴかの「内藤こづえ」だった。私も、へらへらの若手演出家ではあったが、「内藤さん」は若くしてすでに衣裳デザイナー（当時どんな呼び方をされていたのか覚えていないが）として群を抜いていた。だからきっと、膨大な種類のオファーが、彼女にはあつただろう。その中で、よくぞ舞台の衣装デザインという、金にならず手間ばかりかかる仕事を引き受けてくれたと思う。1990年のことだ。東宝プロデュースの「野田秀樹のから騒ぎ」だった。シェイクスピアの作品を、相撲の世界におきかえた。「公爵と侯爵と伯爵と子爵と男爵」と聞いて咄嗟にそれが一番偉いかわからない日本人のために、「横綱と大関と関脇と小結と前頭」にしたのである。シェイクスピアと相撲…「内藤さん」の初めての舞台衣裳デザインの仕事は、そんな難儀な世界だった。今ここに書いてみても、そりや無理だわーという気がする。少なくとも私が衣裳デザイナーなら無理です。なにせ相撲は裸の世界、衣裳とはほど遠い、私ならコントのような相撲取りの着ぐるみを着せて万事休すです。さあどうする「内藤こづえ」、この試練をどう乗り越える…（つづく）

第一話

そして初めての衣装打ち合わせ。私は驚いた。「内藤さん」が持ってきたデザインは、私が知っていた「内藤こづえ」の世界とは全く違った。こづえさんが描いてきたものは、明らかにシェイクスピアの世界に寄っていた。今思えば、「内藤こづえ」は裏の裏をかいたのだ。「相撲」なんていう挑発には乗っからない。それは演出家がやればいい。自分はシェイクスピアの世界を衣裳で描いてみたい。そういう欲求だったのでないか。しかし、その当時から浅はかな私はその場で、穏やかな暴言を吐いた。「僕が内藤さんにお願いしたいのは、こういうよくあるシェイクスピアではなくて、内藤さんのあの遊び心に溢れたあれです。」

…「内藤こづえ」のこめかみが、穏やかにぴきっと音を立てた。心中でめらめらとこう叫んでいた。「そんならやってやろうじゃない。後でうろたえても知らないからね～」…（つづく）

野田秀樹

のだ・ひ・でき 劇作家 演出家 役者 NODA・MAP (野田地図) 代表
<http://www.nodamap.com>

炎の龍と化した「内藤さん」が再び描いてきたデザインは全く違った。艶やかだった。それまでの芝居の世界で、ああした艶やかな衣装が舞台上に上がったのは、歌舞伎の世界くらいではないか。現にその後、私が歌舞伎を演出した時に、衣裳デザインを担当してくれた「日比野こづえ」は、歌舞伎の世界のバサラな衣装に魅了されてしまい、日比野こづえと歌舞伎には親和性が元々あった。と私は考えている。…って、私は誰だ？ 服飾評論家かい。

内藤こづえの「から騒ぎ」のデザインは、艶やかで楽しく可愛く洒脱で格好良かった。舞台衣裳デザイナーとして軽々と鮮烈にデビューを飾った。だがそれから、日比野こづえと私の長く暑い死闘が始まるのである…ポイントは「死闘」ではない、「暑い」である。（つづく）

第四話

ひびのこづえの舞台衣裳デザインは、どれもこれも戯曲以上のイメージを引き出してくれた。が、初期の頃は、どれもこれも着ると「暑い」、暑かった。

例えば、「キル」という芝居。ジンギスカンをファッショントレーナーとして描いた。世界中に制服を着せるという野望=世界征服（制服）をもくろむというもの。これは、ファンションそのものを舞台に持ち込んだ芝居であるから、こづえさんも特に力が入っていた。モンゴルの草原の羊そのものを、衣裳として着込んでいくという場面では、舞台一面が羊毛で覆われるような、演劇史に残る衣裳をデザインしてくれた。ただやっぱり暑かった。そして私は、またこづえさんの前で、無神経に暴言を吐いたと思う…「暑い」。こうした些細な暴言の積み重ねがやがて、大きな事件を引き起す。世に言う「三くだり半事件」である。ただし、私しか知らない。（つづく）

第三話

2012年、突然私は、日比野こづえから一通の手紙をいただいた。「内藤さんとは長らく仕事をしそうかもしれないで、一旦、離れたところでやっていきたい」というものだった。…焦った。だが、心当たりはあった。その頃、私は、こづえさんが、新しい作品の衣裳デザインを描いてくるたびに「艶やかすぎる」「楽しすぎる」「可愛すぎる」「おしゃれすぎる」「格好良すぎる」と注文を出していた。「艶やかで楽しくてかわいくておしゃれで格好いい」デザインを求めていながら、舞台上にあげた時、説明過剰にならないかという演出家としての不安を、そのままデザイ

ナーにぶつけていた。結局いつも、こづえさんは、元のデザインのままの方が断然いいという事を知りながら、渋々修正を加えてくれた。にも拘らず私は大体いつも「あ、やっぱり元通りでいいや」といった、手間暇をかけさせていた。「おい、ふざけんなよ～」という気持ちが、十年分はたまっていたと思う。私は長い手紙を書いた。趣旨は「すいません」だった。許してもらったのかは、わからないが、それ以後も、仕事は続いている。続いているだけでなく、ますます磨きがかかっている。

昨年、紀伊國屋演劇賞を日比野こづえがやっ

と受賞した。私は、三十年遅いよと思う。だが、その演劇賞でのこづえさんの受賞のスピーチは、ほんとに「謙虚」を絵にかいたような感動的なものだった。私は、そのスピーチを聞きながらどうしてこういう「私なんか…」みたいな性格の人が、あんなにもこちらの目を覚ませ、頭にガツーンと食らわせるようなデザインを考えつくのだろう、と思った。そして日比野こづえの創作のルーツ、それは「日比野こづえの味噌汁」にある。…（つづく）

第六話

いつ「内藤こづえ」が、「日比野こづえ」に変わったのかは思い出せない。もちろん、こづえさんが、尊敬してやまない夫の日比野克彦と結婚したから、日比野姓に変わったわけだ。けれども、二人は学生時代からの仲もあるし、すでにずっと一緒に暮らしていたから、籍は入れないのだろうと思っていた。いつの間にか電撃結婚だった。私は結婚しても「内藤さん」は「内藤こづえ」という名前で仕事を続けるだろうと思っていたが意外にも、こづえさんは、「日比野こづえ」という名前を選んだ。私は、そこにも「日比野こづえ」の創作の根っこを感じる。

私は、二人の結婚当時、すでにプライベートでもかなり深く入り込んでいた。日比野夫妻が新しい家に引っ越しした頃は、自身は離婚をしたりなんだりで「家庭」を持っていなかった。それで、日比野家は、その新築の家の屋根裏とはいえ、とても快適な部屋を、私がいよいよ生活者としてダメになった時、転がり込んでいい所として用意してくれていた。そんなわけで、日比野克彦と明け方まで飲んだ挙句、そのまま日比野家に滞在し、「日比野こづえの味噌汁」までいただいた。

私は、その真新しい家のキッチンに立つ日比野こづえを見た時、新鮮さとともに、あ、そうかこういう人だと、直感的に「日比野こづえ」を掴んだ…つもりになった。…（つづく）

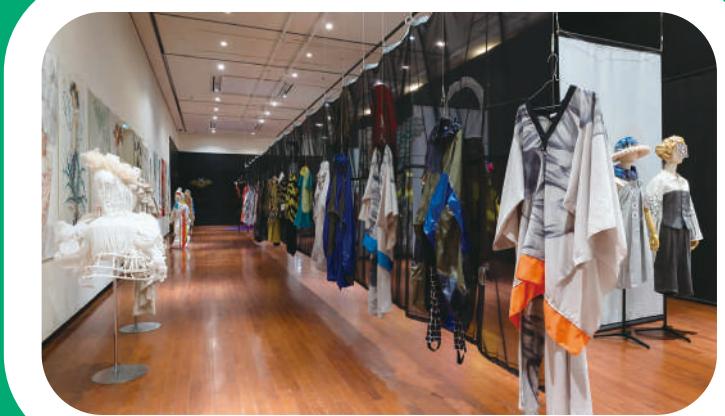
第七話

（最終回）

キッチンに立っているこづえさんを見た時、「日比野こづえ」というアーティストは、日本が持っていた「家庭」という空間を、あるいは価値観をとても大切にしている。そう直感した。「家庭」への憧憬、あるいは敬意がある。三十年以上前であった頃の「内藤こづえ」は、あの秀逸なるパッチワークを、自らの手でやり、他人にやらせていかなかった。そのパッチワークは、日本の「家庭の縫い仕事」に繋がる。その姿のまま、キッチンに立っていた「日比野こづえ」は、仕事同様に、実に几帳面で、そして手さばきも素晴らしい、楽し気で、味噌汁のみならず、さまざまな料理を作っていた。キッチンに立つことも、縫いをすることも、夫の姓を名乗ることもあっていい、それが好きなのであれば。と日比野こづえは考えているに違いない。そんなところで新しいの古いのと考えず、（だからもちろんキッチンに立たなくても縫いをしなくても夫の姓を名乗らなくてもいい）ただ、楽しく ureしく感じるものを選べばよい。みんな窮屈にならなくていい、そんな感じだろうか？ うん、だから、いつも清新で艶やかなのか。今更「日比野こづえの味噌汁」を引き合いに出して、「家庭の味」という価値観まで私が持ち出しているのは、実はそんなところに、新しさも古さもないことを「日比野こづえ」に教えてもらったからだ。「家庭」という日常にこだわり続けて、いやこだわり続けているからこそ、日比野こづえは、何十年も新しいものを作り続けている。

ただ、これはすべて私の邪推だ。

本当に、日比野こづえの仕事の根っこに「家庭」=日常への憧憬、すなわち「日比野こづえの味噌汁」があるのかは、「ひびのこづえのみぞしる」…「日比野こづえのみぞ知る」のである。



「不思議の森に棲む服 ひびのこづえ×KUMAMOTO展」会場より
NODA・MAP「フェイクスピア」衣装 2021年初演(東京芸術劇場)
撮影:宮井正樹

開館20周年クラウドファンディング実施の報告と御礼

熊本市現代美術館では開館20周年という節目に実施する2つのリニューアルを実現するため、クラウドファンディングという形で広く皆様からの支援を募りました。結果、459人の方から12,528,000円のご支援を賜ることができました。厚く御礼申し上げます。



イラスト:日比野克彦

クラウド ファンディング 概要

プロジェクトタイトル	熊本市現代美術館の「これから」をつくる～アートでつながる交流拠点へ
支援募集期間	2022年6月15日(水)～7月29日(金)
プロジェクト形式	All or Nothing
寄付総額	12,528,000円(第一目標金額:500万円、NEXT GOAL:900万円)
寄付者数	459人
資金使途	新たなスペース「ART LAB MARKET」(ショップ & コミュニティースペース)のオープンと、「ホームギャラリー」(図書室)のリニューアルの什器製作費等

<https://readyfor.jp/projects/CAMK2022>

ギャラリーⅢ
G3-Vol.146

熊本市現代美術館開館20周年記念 Our Attitudes

会期：2022年8月28日(日)～10月30日(日)



開館20周年記念企画として、1980年代生まれの熊本出身作家の作品を取り上げ、この20年のうちに熊本から芽吹いた新たな表現を紹介します。

また作品展示のほか、作家インタビューやトーク等の関連プログラムをとおして、若い世代と当館の間に発生してきた関係性を振り返りつつ、今後の美術館のあり方にについても可能性を探っていきます。

出品作家：坂本夏子、園田昂史、武田竜真、松永健志

[左] 坂本夏子 左から
《Signals, re-constellation》
《Signals, mapping》《Signals, module》2019
キャンバスに油彩 3点組
各194×130.3cm 高橋コレクション
Photo: Ichiro Mishima
©Natsuko Sakamoto Courtesy of ANOMALY
[右] 武田竜真《The Eye of a Needle》2021
クレート、スタイルフォーム、映像
Photo: WATANABE Osamu
Courtesy: 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa



熊本市現代美術館 Contemporary Art Museum, Kumamoto

ART KISS LETTER Vol.104(2022年9月) [次号は2022年10月発行予定]
編集：佐々木玄太郎 執筆：野田秀樹 デザイン：apuroot
印刷：シモダ印刷 発行：熊本市現代美術館 www.camk.jp
〒860-0845 熊本県中央区上通町2-3 Tel 096-278-7500

[来館者の皆さまへのお願い]新型コロナウィルスの感染拡大を防止し、美術館を安全にご利用いただくため、ご来館の際には手指消毒・咳エチケットのご協力ををお願いいたします。また、発熱・咳・くしゃみ等の風邪の症状がある方は、ご来館をお控えください。

